

複他動詞の意味地図

山田洋平・山田怜央
(東京外国語大学大学院)

1. はじめに

本稿ではまず Malchukov et al. (2010)の提案する2種類の複他動詞に関する意味地図を提示する。その後、それを研究対象となる4言語(モンゴル語、アイルランド語、ラワン語、フィジー語)に適用させてそれぞれの相違点を見る。

1.1. 本稿の構成

2節では、R項の意味地図を紹介した後、研究対象となる4言語の複他動詞構文に現れるR項の意味役割の範囲を意味地図に示す。この中で、特に他の3言語と比べるとR項が取りうる格の機能が比較的広いモンゴル語の事例を取り上げ、複他動詞構文の定義が難しいことを述べる。

そして続く3節では、動詞意味タイプの意味地図を提示し、研究対象となる上記4言語のデータをそれに適用させて示す。その様相はやはり言語によってまちまちだが、それでも Malchukov et al. (2010)の提案する意味地図を逸脱するものではないということが分かる。

最後に4節で、Malchukov et al. (2010)の意味地図に含まれていないが、複他動詞と考えることができそうなさらなる可能性を提案し、今後の課題を示す。

1.2. 対象言語

本稿で対象とする言語は①モンゴル語、②アイルランド語、③ラワン語、④フィジー語の4言語であり、それぞれの言語につき複他動詞構文の意味地図を考える。系統的にはそれぞれモンゴル語族、インド・ヨーロッパ語族、チベット・ビルマ語族、オーストロネシア語族に属する言語であり、いずれも互いに系統関係を持たない言語である。地理的な分布については次頁の図1を参照のこと。



図 1 : 言語地図

これらの言語の類型論的な特徴(語順)および複他動詞構文の特徴(flagging と indexing それぞれにおける基本的な各配列のタイプ)を次の表 1 に示す。それぞれの言語のデータについては表 1 で示す報告者が提供したものである。モンゴル語、ラワン語、フィジー語はそれぞれの言語の話者からエリシテーション調査を行い、アイルランド語については辞書などから用例を収集した。

表 1 : 本 WS で対象とする言語一覧

| 言語名 | 語順 | flagging | indexing | 報告者 |
|-----------|--------|-------------|-------------|------|
| ① モンゴル語 | SV/APV | indirective | N/A | 山田洋平 |
| ② アイルランド語 | VS/VAP | indirective | N/A | 山田怜央 |
| ③ ラワン語 | SV/APV | secundative | secundative | 大西秀幸 |
| ④ フィジー語 | VS/VPA | indirective | indirective | 岡本進 |

2. R 項の意味地図

2.1. Malchukov et al. (2010)による R 項の意味地図

Malchukov et al. (2010)は R 項が取る形式がどのような意味範囲まで担いうるか、ケチュア語(ケチュア語族)、エマイ語(ニジェール=コンゴ語族)、エウエン語(ツングース諸語)の事例を挙げて次の図 2 のような意味地図を示している。図は Haspelmath (2003)の与格意味地図に加え、三項動詞を取りうる **malefactive source** (被害の起点、「彼から金を盗った」)と **patient** (被動者、「彼を棒でぶった」)が右に枝を伸ばしている。ここでは R 項が担う典型的な意味役割 **recipient** を中心として、連続を成す意味役割を線で結ぶことで示されている。**secundative** タイプの分布を見せるエマイ語では **recipient** から左へ分布が伸びて **patient** 被動者に伸びている。左上の **malefactive source** はいわゆる二重目的語構文など典型的な複他動詞構文に現れやすいものであるという。エウエン語は **recipient** から右上は **beneficiary**、右下へは **goal** と **location** まで伸びる。ケチュア語では典型的な複他動詞構文は向格で成され、受益を表す属格形式が隣接する **possessive** も担うという。

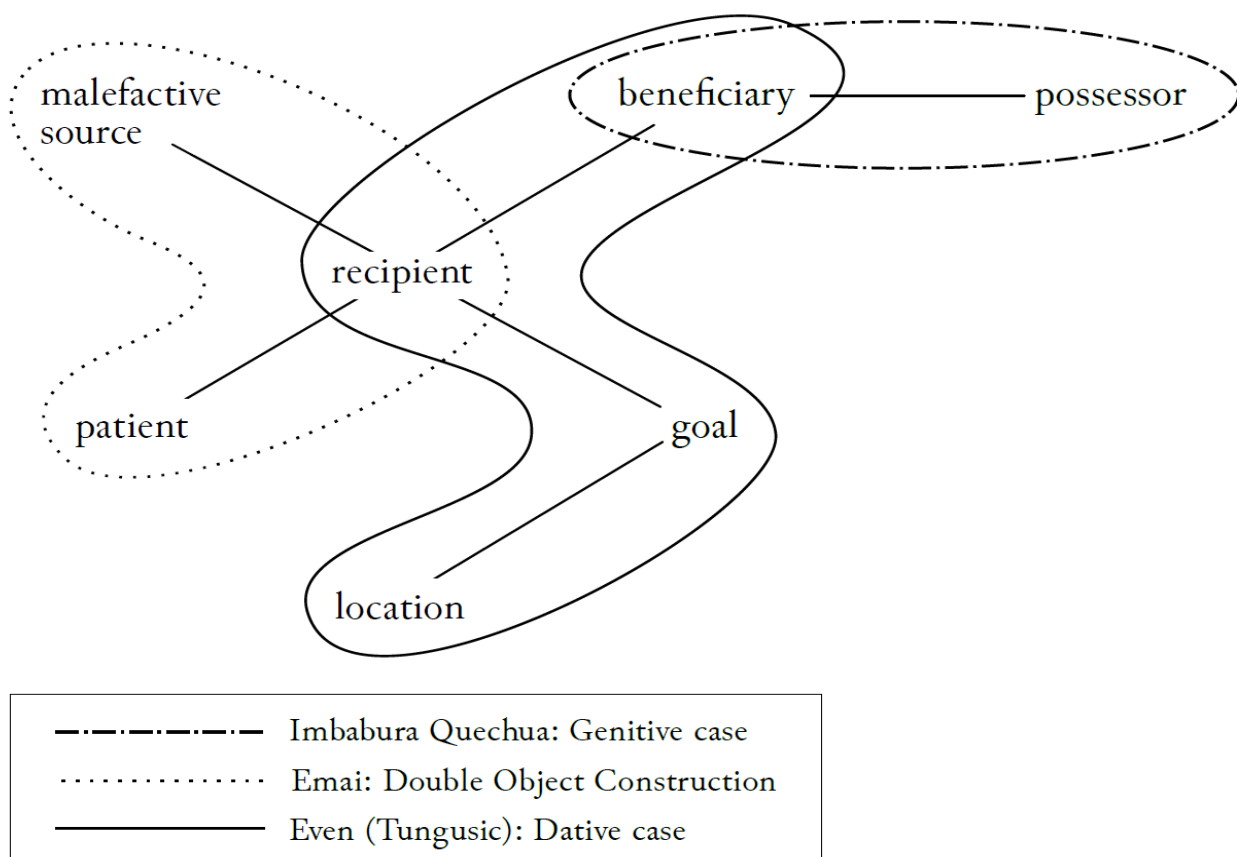


図 2 : Malchukov et al. (2010)による R 項の意味地図

2.2. 各言語での R 項の意味地図

2.2.1. モンゴル語

以下、図3がモンゴル語における R 項の意味地図である。

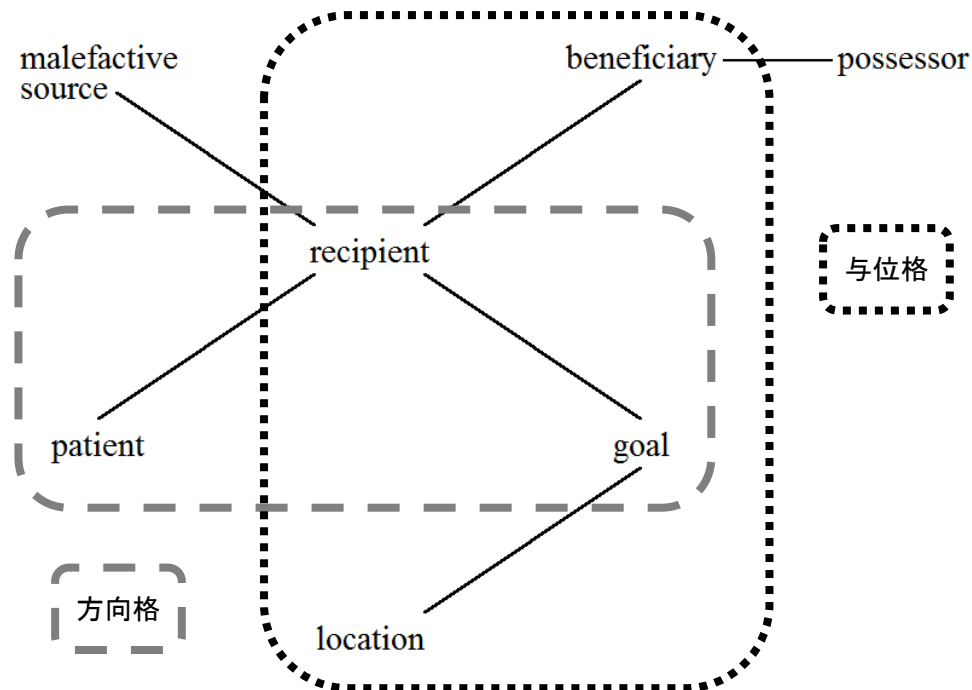


図3：モンゴル語の与位格と方向格の意味地図

モンゴル語の複他動詞構文はいわゆる他動詞文に R 項が追加されたものであると考えられる。R 項は「与える」のような動詞の場合には与位格(DAT: dative-locative)で標示され(例文(1))、「投げる」のような動詞の場合には方向格(DIR: directive)で標示される(例文(2))。

- 1) Би дүүд R тэр номыг T өгсөн.
 bi dүү-d ter nom-iig ög-sөн
 1SG younger.brother-DAT that book-ACC to.give-PERF

「私は弟に本をあげた」 [recipient]

- 2) Би түүн рүү R чулуу T шидсэн.
 bi түүн рүү čuluu šid-sen
 1SG 3SG DIR stone to.throw-PERF

「私は彼に石を投じた」 [goal]

一部の移動動詞の項となる方向格は省略されることがあるが、複他動詞構文における受け手項がいずれの格も付されずに現れることは無い。方向格は接触動詞については被動者を表示することができる。与位格が表す beneficiary はモノの授受を含意する場合に限定さ

れるらしい。

また与位格という名に表されている通り、(3)のような位格としての *location* の用法もある。goal を表す与位格と方向格の使い分けはどのように行われるのかよくわからない。

- 3) Би Дарханд амьдарч байна.
 bi darxan-*d* amjdar-č bai-na
 1SG PN-DAT to.live-SIM to.be-NPST

「私はダルハンに住んでいる」

Kullmann and Tserenpil (2005)

- 4) Би сургууль руу явсан.
 bi surguulj *ruu* jaw-san
 1SG school DIR to.go-PERF

「私は学校に行った」

2.2.2. アイルランド語

以下、図4がアイルランド語におけるR項の意味地図である。

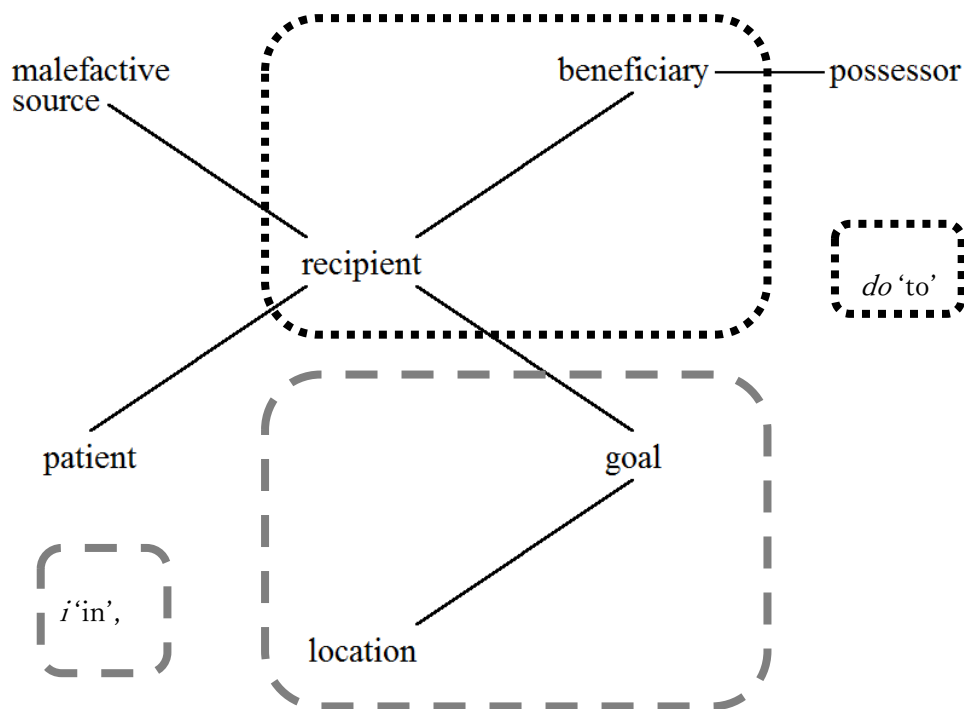


図4：アイルランド語の前置詞 *do* 'to', *i* 'in' の意味地図

アイルランド語における複他動詞構文とは、基本語順 VAP で示される他動詞文(例文(5))に R 項が追加されたものであると考えられる。もっとも典型的な R 項である *recipient* は通常、前置詞 *do* 'to' によって標示される(例文(6))。ただしこの前置詞は *recipient* に限らず、*beneficiary* も表しうる(例文(7))。goal や *location* には、場所を表す前置詞 *i* 'in', *ar* 'on' などが

用いられる(例文(8)および例文(9))。

なお、下記のうち、例文(8)のみ辞書の記述からの引用だが、その他は全てオンラインコーパスから得たものである(辞書・オンラインコーパスそれぞれの情報については、稿末の参考文献一覧に記載)。

5) Bhris an naíonán an buidéal.

break.PST DEF.SG infant.SG DEF.SG bottle.SG

「その子供はその瓶を割った」[単他動詞文]

6) Thug Brian an t-airgead **do** na daoine R.

give.PST PN DEF.SG money.SG to DEF.PL person.PL

「ブリーアンはその人たちにそのお金をあげた」[recipient]

7) rinne mé bricfeasta T **do** C R.

make.PST I.SG breakfast.SG to PN

「私はCのために朝食を作った」[beneficiary]

8) Chuir sé airgead T **sa**¹ bhanc R.

put.PST he.SG money.SG in+DEF.SG bank.SG

「彼はお金をその銀行に入れた」[goal]

9) Chuir Róisín muga caifí T **ar** an mbord beag R

put.PST PN mug.SG coffee.PL on DEF.SG table.SG small.SG

「ローシーンはコーヒーのマグをその小さな机の上に置いた」[goal]

goal や location における前置詞の使い分けは、名詞の特性などによってなされる。それは、英語などの西欧語における前置詞の使い分けとある程度対応するものであろう。

¹ sa は前置詞 *i* 'in' と定冠詞 *an* 'the' が融合した形式。

2.2.3. ラワン語

以下、図5がラワン語におけるR項の意味地図である。

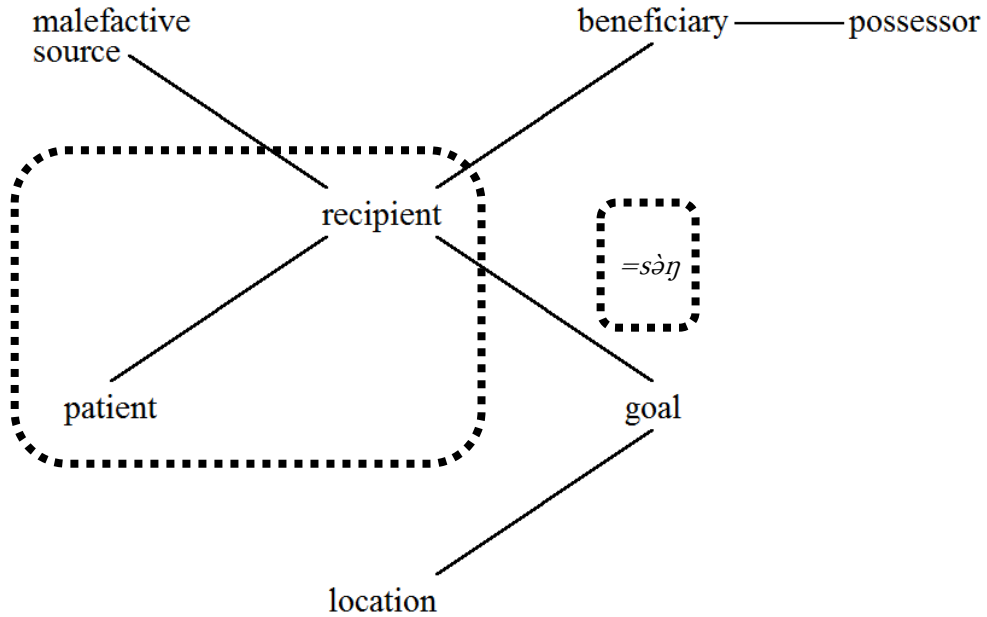


図5：ラワン語の=səŋの意味地図

具体的な例文を含め、詳細はこの後の個別報告にて紹介するので、ここでは意味地図を挙げるだけに留める。

2.2.4. フィジー語

以下、図6がフィジー語におけるR項の意味地図である。

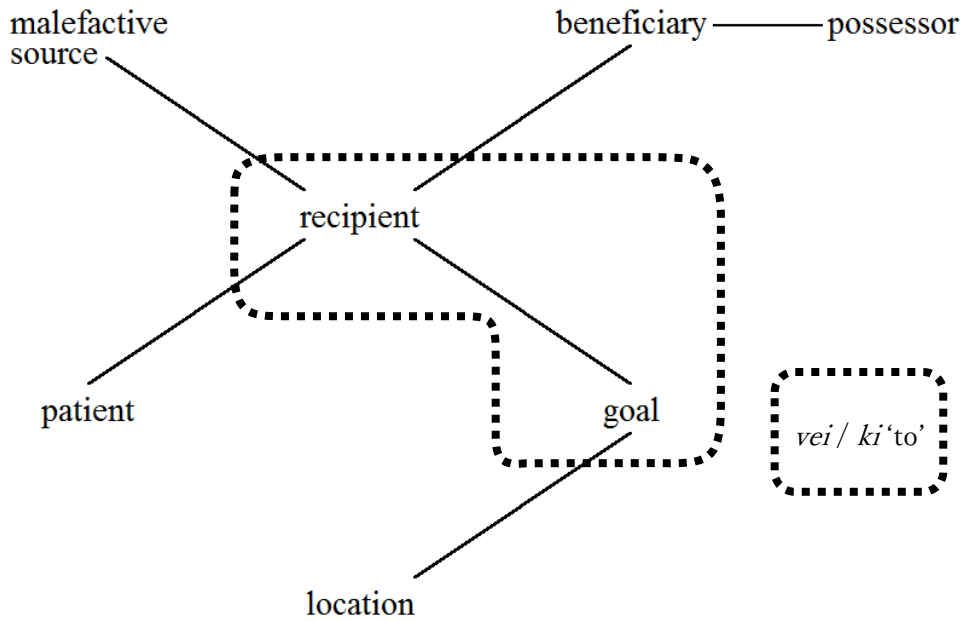


図6：フィジー語の前置詞 vei / ki'to'の意味地図

フィジー語では「与える」などの授受動詞では、前置詞 *vei* または *ki* を用いて R 項を示す。なお、どちらも英語の‘to’に当たるような前置詞であるが、前者は人名及び代名詞に、後者は普通名詞に用いられる。

これに対し、「投げる」などの投擲動詞などでは *secundative* タイプのような分布も見られるという。

具体的な例文を含め、詳細は個別報告にて紹介するので、ここでは意味地図を挙げるだけに留める。

3. 動詞意味タイプの意味地図

3.1. Malchukov et al. (2010) の動詞意味タイプの意味地図

Malchukov et al. (2010) は次に、同じ格でも動詞の意味タイプによって意味役割が変わるといふ可能性について触れている。例えばロシア語の動詞 *o-darit* ‘give as a gift’ は、次の例文 (10) のように R 項に対格、T 項に具格を取る。それに対して類義語である (*po-*)*darit* は例文 (11) のように R 項に与格、T 項に対格を取る。なお、(10) と (11) はどちらも辞書に記載されているものである。

- 10) Я *одарил* детей R игрушками T.
 Ja *odar-il-ø* det-ej igrušk-ami
 I.SG.NOM give.PFV-PST-M child-PL.ACC toy-PL.INST
 「私は子供たちにおもちゃをばらまいた」
 (子供たち＝対格、おもちゃ＝具格。 *secundative* 型格配列)

[木村他(編) (1995: 675)²]

- 11) Я *подарил* ему R авторучку T.
 Ja *podar-il-ø* emu avtoručk-u
 I.SG.NOM give.PFV-PST-M he.SG.DAT fountain_pen-SG.ACC
 「私は彼に万年筆を贈った」
 (彼＝与格、万年筆＝対格。 *indirective* 型格配列)

[木村他(編) (1995: 213)]

このように、動詞の意味タイプによって格配列に違いがあるということ、ジャミンジュン語(オーストラリア諸語、*neutral* タイプ)、フィンランド語(ウラル語族、向格を用いた *indirective* タイプ)、西グリーンランド語(エスキモー＝アレウト語族、具格を用いた *secundative* タイプ)の事例を挙げて図 7 のような意味地図を示している。

² 対照のため、不定形で記載されていた用例を、筆者が(11)と同じ「完了体過去男性単数」に活用させて示してある。日本語訳もそれに合わせて多少の変更を加えた。

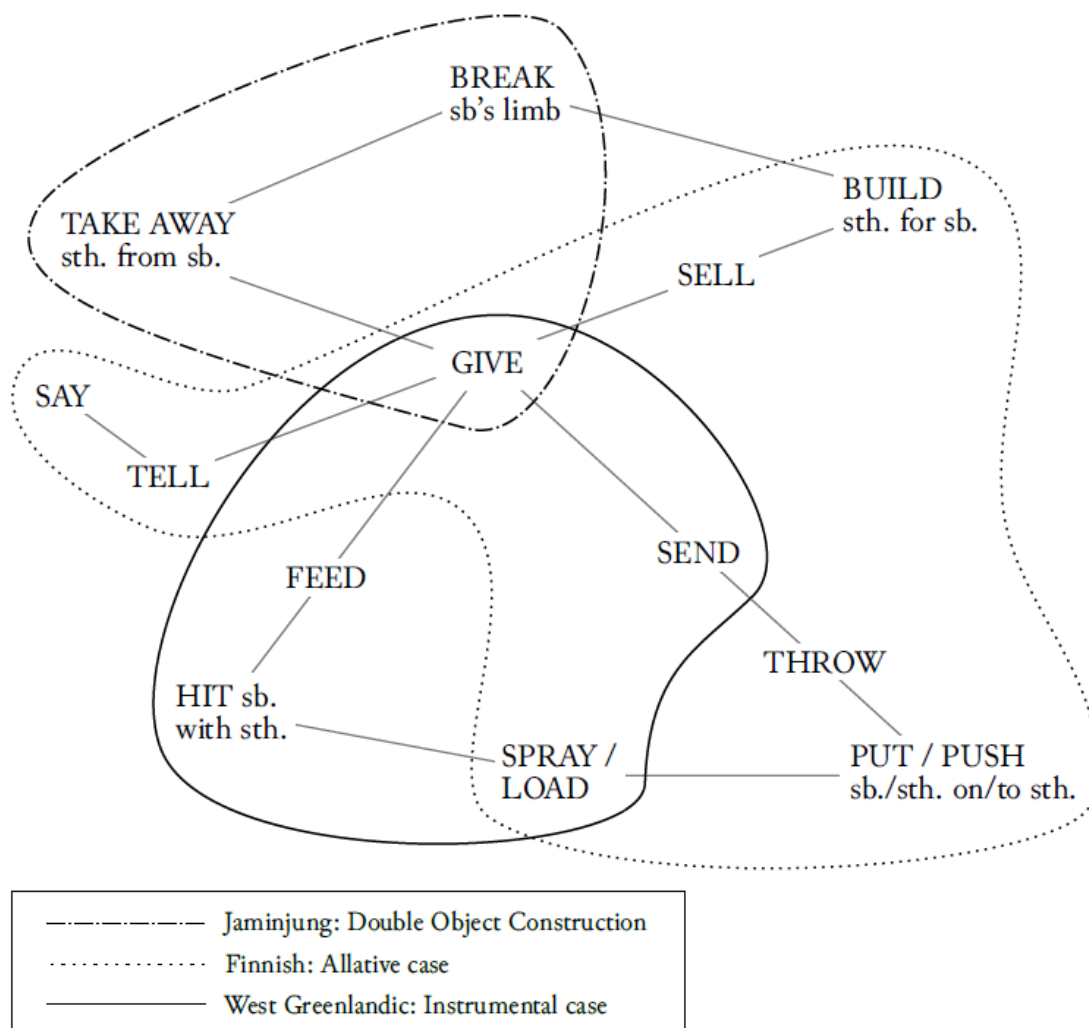


図7：Malchukov et al. (2010)による動詞意味タイプの意味地図

この意味地図を見てみると、中心に GIVE が置かれ、そこから 5 つの経路(path)が伸びている。

1 つ目は「向格(allative)経路」であり、SEND - THROW - PUT / PUSH と続く。2 つ目は「具格(instrumental)経路」で、FEED - HIT と続き、この両者の間には SPRAY / LOAD が配置される。上半分に目を向けると、3 つ目に「受益(benefactive)経路」が SELL - BUILD と伸び、4 つ目に「被害(malefactive)経路」が TAKE AWAY へと伸びており、その間に BREAK が配置される。さらに 5 つ目の経路として、発言系の動詞をふくむ TELL - SAY という経路が伸びている。

3.2. 各言語の動詞意味タイプの意味地図

3.2.1. モンゴル語

モンゴル語では R 項に与位格を取る動詞の範囲が広く、GIVE, SELL, SAY, TELL, FEED, SPRAY までをカバーする。右下に伸びる「向格経路」の SEND, THROW, PUT / PUSH については方向格が用いられ、SPRAY の位置で与位格とオーバーラップするという。また、PUT に関しては与位格との置き換えも可能であると思われる。

調査の意図を外れたデータであったため、下の図 8 では与位格に含めていないが、TAKE AWAY についての調査では与位格を用いて「泥棒にお金を無くす」という表現が得られた。与位格が用いられたという点で複他動詞的であると言える。

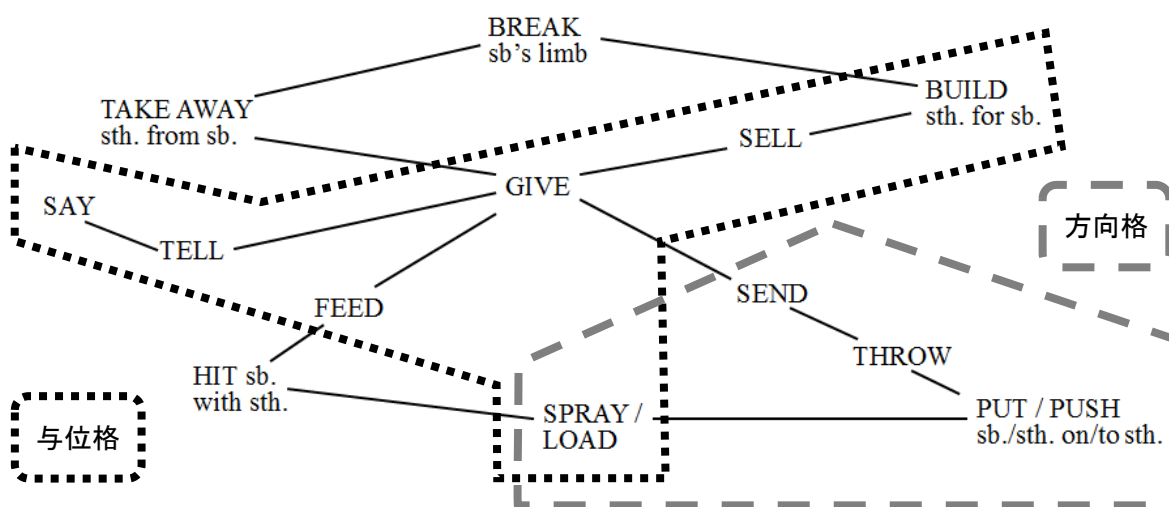


図 8：モンゴル語の動詞タイプの意味地図

3.2.2. アイルランド語

アイルランド語は以下図 9 に示す通り、複雑な様相を呈している。R 項に前置詞 *do* ‘to’ を取るのは GIVE, TELL, BUILD のみで、右下の「向格経路」の SEND, PUT / PUSH および SPRAY / LOAD では、R 項に方向を表す何らかの手段を取る。

問題となるのは前置詞 *le* (第一義には‘with’)を用いたものだが、これには 2 種類が考えられる。この前置詞が表しているものは、FEED, HIT に関しては T 項寄りの具格的な用法だが、対して SAY, SELL, THROW に関しては R 項を表している。なぜこのような奇妙な体系になっているのだろう。

このことについて、Müller (2000: 198)によると「古アイルランド語の *fri* ‘towards’ と *la* ‘with’ は現代アイルランド語の *le* に合流し、*as-beir fri* ‘says to’ は現代語で *deir le* ‘say with’ となった」とのことである。つまり SAY, SELL, THROW の 3 つの動詞が取る *le* を *fri* ‘towards’ に由来するものと考えると、さほど奇妙ではなくなるだろう。

前置詞 *do* ‘to’ の使用域は BUILD が取る benefactive 的な要素にまで伸びるが、反対側の TAKE AWAY では malefactive 的な要素に別の前置詞 *ó* ‘from’ が現れる。

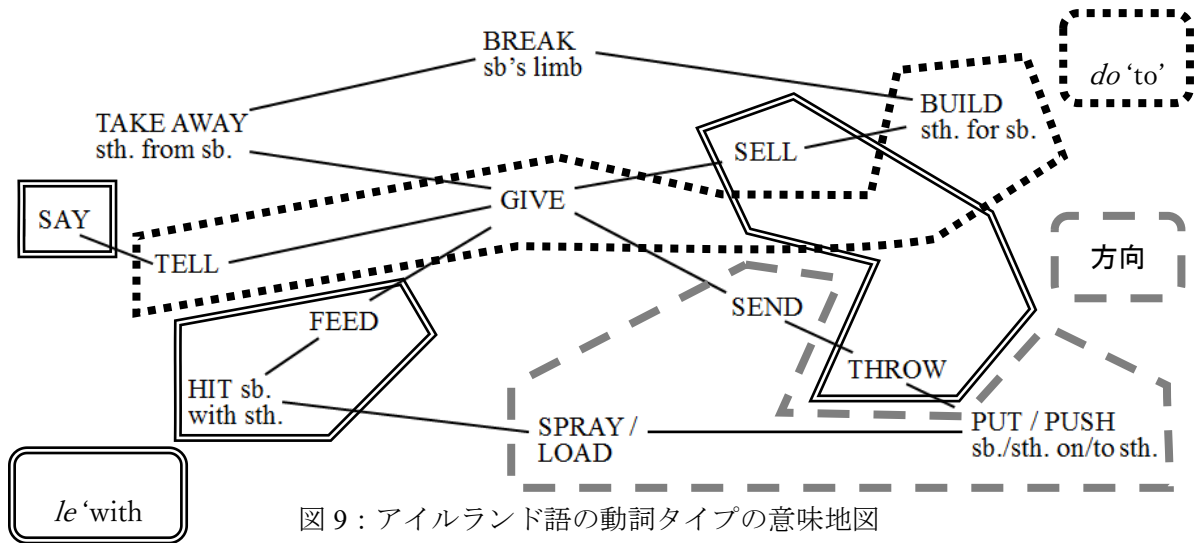


図 9：アイルランド語の動詞タイプの意味地図

3.2.3. ラワン語

ラワン語では、複他動詞的な振る舞いを見せるのは GIVE のみであり、2 節で述べた通り、R 項が対格小辞=*səŋ* を取り、さらに動詞は R 項に一致する。SAY, TELL についても R 項が対格小辞を取るが、動詞は R 項に一致しない。

FEED, SELL, BUILD は R 項を benefactive 的な *dəpat* 「～のために」が示すが、反対に TAKE AWAY が取る malefactive 的な要素には奪格が用いられる。

SEND, THROW, PUT / PUSH, SPRAY / LOAD はそれぞれ向格や位格などが用いられる。

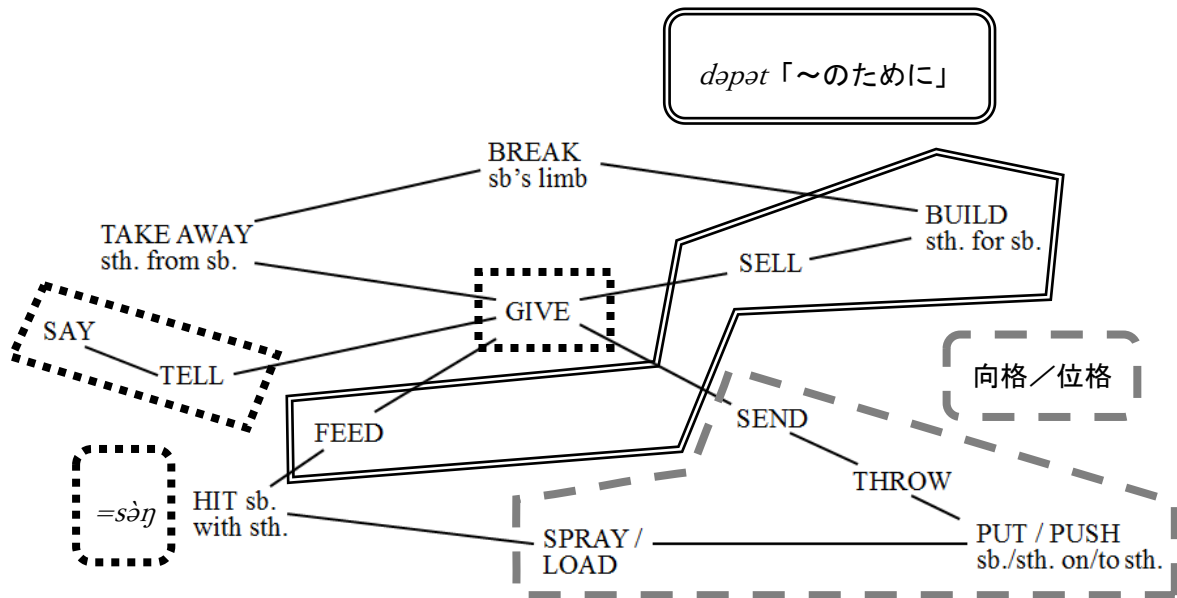


図 10：ラワン語の動詞タイプの意味地図

3.2.4. フィジー語

フィジー語では R 項に *vei / ki 'to'* を用いる動詞の範囲が非常に広く、GIVE を中心に左へ向かい TELL, SAY、右へ向かい SELL, BUILD, SEND, THROW, PUSH (ただし PUT では不可)

までがこの形式でカバーされる。

FEED, HIT と SPRAY / LOAD に関しては *e* という前置詞が現れるが、前者は具格的な意味を持つのに対し、後者では位格的な意味を持つ。この 2 つを同じものと見るべきか、という点には一考の余地があるかもしれない。

前置詞 *vei / ki 'to'* の使用域は BUILD が取る benefactive 的な要素にまで伸びるが、反対側の TAKE AWAY では malefactive 的な要素に別の前置詞 *mai 'from'* が現れる。

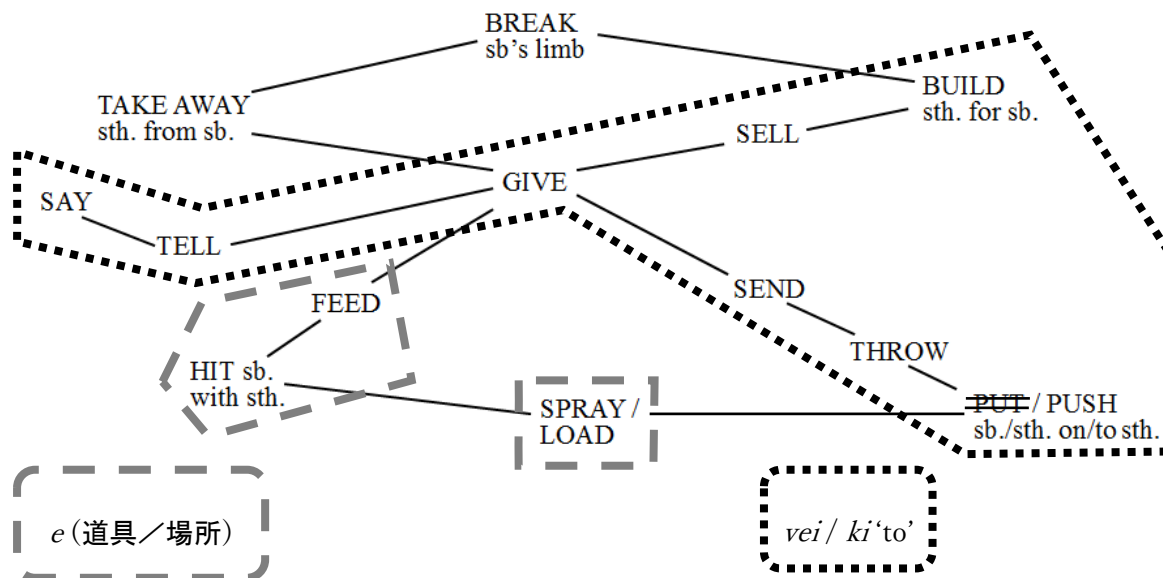


図 11：フィジー語の動詞タイプの意味地図

4. さらなる可能性

ドイツ語は複他動詞に関して、Malchukov et al. (2010)が示すように与格・対格を持つ indirective タイプの言語であり、*geben* ‘give’などに関してはそのように振舞う。しかし *lehren* ‘teach’ という動詞は R 項・T 項ともに対格の二重対格(neutral タイプの配列)を用いる。ここでは Malchukov et al. (2010)が先行研究として挙げている Plank (1987)から例を引用する。

12) Frl. Schmidt lehrt die Mädchen das Stricken.
Miss PN teach.PRS.3SG DEF.PL.ACC girl.PL.ACC DEF.N.SG.ACC knitting.N.SG.ACC

「シュミット嬢はその少女たちに編み物を教えている」

[Plank (1987: 41)]

日本語で考えてみると、「彼は生徒に日本語を教える」では与格・対格という配列を用い、二重対格「*彼は生徒を日本語を教える」は非文となる。だが、R 項・T 項の片方を落とした単他動詞構文ならば「彼は日本語を教える」「彼は生徒を／に教える」のように、複他動詞における R 項・T 項のどちらも対格で示すことが可能である。

英語に関しても状況は日本語とある程度対応していると考えられるが、このことから「教える」という動詞は、複他動詞としてまた違った特性を持っているはずである。この

グループの動詞を仮に TEACH として、Malchukov et al. (2010)が提示する意味地図上のどこに配置されるだろうか。

略号一覧

| | | |
|------------------------|--------------------|-------------------|
| 1: first person | GEN: genitive | PFV: perfective |
| 3: third person | INST: instrumental | PL: plural |
| ACC: accusative | M: masculine | PN: proper noun |
| DAT: dative(-locative) | N: neuter | PST: past |
| DEF: definite | NPST: non-past | SG: singular |
| DIR: directive | PERF: perfect | SIM: simultaneous |

参考文献

- 木村彰一他(編) (1995) 『博友社ロシア語辞典 改訂新版』 東京：博友社
- 橋本勝 (2010) 『ニューエクスプレス モンゴル語 (CD 付)』 東京：白水社
- Malchukov, Andrej. Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) ‘Ditransitive constructions: a typological overview’. In Malchukov, Andrej. Martin Haspelmath and Bernard Comrie (eds.) (2010) *Studies in Ditransitive Constructions A Comparative Handbook*. Berlin/New York: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG
- Müller, Nicole (2000) *Agents in Early Welsh and Early Irish*. Oxford: Oxford University Press
- Plank, Frans (1987) ‘Direkte indirekte Objekte: Was uns lehren lehrt’. In *Leuvense Bijdragen*, 76: 37-61
- Kullmann, Rita and Dandii-Yadamyn (2005) *Mongolian grammar*. 3rd revised edition. Улаанбаатар : Admon.

オンライン資料

- Foclóir Gaeilge-Béarla* (<http://www.teanglann.ie/> (Retrieved 25/09/2016)) Online Edition of Niall Ó Dónaill (1977) *Foclóir Gaeilge-Béarla*. Daly City: Colton Book Imports
- Nua-Chorpas na hÉireann* (<https://focloir.sketchengine.co.uk/> (retrieved 25/09/2016))

Semantic map of ditransitive construction in four languages

Yohei YAMADA, Leo YAMADA
(Tokyo University of Foreign Studies)

In this paper, we consider ditransitive constructions in four languages – Mongolian (Mongolic), Irish (Indo-European), Rawang (Tibet-Burman) and Fijian (Austronesian), based on the description of Malchukov et al. (2010).

Here, the two types of semantic maps will be presented.

i) The first one concerns the R argument of ditransitive constructions in the four languages. In Mongolian, the case denoting the R argument is called dative-locative, and it denotes also the location, as implies this terminology. In Irish, the R argument is expressed by the preposition *do* ‘to’, which can denote also the beneficiary. Regarding the last two of the languages – Rawang and Fijian, see the individual papers.

ii) The second one concerns some variations of ditransitive verbs in the four languages. In Mongolian and in Irish, the results do roughly accord with the description of Malchukov et al. (2010), note that Irish has a little complexed distribution because of the polysemy of the preposition *le* ‘with’ or ‘toward’. Again, regarding Rawang and Fijian see the individual papers.

At the end of the paper, we give a further possibility of ditransitive constructions: the verb ‘teach’ can take an accusative case both for the R argument and for the T argument in the monotransitive construction in Japanese; in German, which has the indirective type case marking in general, the verb *lehren* ‘teach’ can take two accusative cases for the R argument and the T argument in the ditransitive construction.